



9月は雨の日が多く、日照時間日本一の八ヶ岳南麓でもすっきり晴れた日は数えるほどでした。その晴天の日に思い立って出かけた初の中央アルプスです。入笠山に登ると八ヶ岳と反対側にどっしりと聳える中央アルプス、その主峰の頂上に立つことができ、感無量でした。

さて、今はもう10月末、紅葉が遅いなくと思っていました。風路を起点にぐるっと一周する紅葉回廊コース、お薦めです♪。

初めての中央アルプス

主峰・木曾駒ヶ岳に登頂!

9月2日「木曾駒ヶ岳へ行ってみない？」相棒に声をかけると「木曾駒かア!!」と気合の入った返事。前日に登山グッズを引っ張り出してパッキング、2日午前7時45分、風路を出発。小淵沢インターから

中央道に入りました。約1時間で駒ヶ根インター着。5分足らずで菅の台バスセンターに着きました。

バス・ロープウェイ発券所で、往復のチケットを購入、バス停で待っていると、すぐに「臨時のバスが出る」とのアナウンス。待っていた全員を乗せて出発です。

出発してすぐに太田切川に架かる駒ヶ根橋を渡り、左岸添いの道をどんどん山の中に入っていきます。林道は私たちが乗ったバス1台分の幅しかなく、対向車が来たらどうするんだらう・・・と思っていながら、無線で連絡を取りながら走っていて、下りてくるバスとすれ違う場所も決まっていたようです。右手は樹々が覆いかぶさるようにのしかかる森、左手は深い溪谷の道です。時折、鬱蒼とした森の切

れ目から抜けるような青い空が覗き、濃く深い緑の森とのコントラストが目にも沁みました。

30分で、標高16662mの駒ヶ岳ロープウェイの山麓駅・しらび平に着きました。少し待つと「千畳敷駅までロープウェイが出ます」のアナウンス。定員60名のかかなり大きなロープウェイです。ガタンッ!!大きな音とともにロープウェイが固定されていたプラットフォームから離れ、登り始めました。かなりのスピードでぐんぐん登っていきます。窓際に立って下を覗くとほるか下の溪谷が俯瞰できました。途中下りてくるロープウェイとすれ違いました。「ビューン!速い!写真を撮る余裕はありませんでした!」

7分半ほどで千畳敷駅着。駅はホテル千畳敷が併設されていてその脇から外に出ました。

八丁坂に息上がる!



正面に宝剣岳の標識、その下方に千畳敷カールが広がっています。そのカールを一周する遊歩道を歩く多くのハイカーが見えます。正面左手にゴツゴツ岩肌の宝剣岳が聳え、その右手に八丁坂の急登が続いています。「ひえッ!あそこを登っていくのか・・・千畳敷駅からカールへ下りていきます。整備された遊歩

道の周りにはもう花は終わっていましたが、盛夏の頃はきっと素晴らしいお花畑と思わせるに十分な草原が広がっていました。遊歩道に入って10数分で八丁坂の分岐。見上げるような急登です。大勢の登山者がはるか上に登っています。

よしッ!気合を入れて登り始めます。ほんの数分で早くも息が切れてきます。息を切らし、汗を流して数10分、八丁坂の中ほどまで登ってくと、登山道の補修・整備をしている作業中の現場。振り返ると千畳敷カールが俯瞰でき、ロープウェイの駅舎とホテルがその向こうに見下ろせました。ここまで来れば、乗越浄土は目と鼻の先!左手に宝剣岳の荒々しい岩峰が迫ってきます。

中岳登頂!



1時間、やつとこのことで急登の八丁坂を越え、乗越浄土の分岐に着きました。正面、やや下りの稜線の先に宝剣山荘、天狗荘の山小屋が並んで見えました。二つの山小屋の脇を抜けると、目の前に中岳が立ちのぼっています。中岳といっても、標高2925m!息を切らして山頂まで登り、小休止。周りのハイマツの周りで数羽のホシガラスが鳴いています。

スペイン 巡礼の道 XIII



21日目 7月4日(木) 10km

ロバに襲われる!

★フロミンタ〜カリオンデロスコンデス

いよいよ最終日。宿の近くのBARでパンとカフェラテのシンプルな朝食。きょうもいい(良過ぎ!)天気です。途中の公園でひとやすみ。木陰がうれしい♪そのあとは自動車道路沿いにセンダという巡礼の道がずっと続きます。「アツッBARはまだか・・・」頭の中はカーニャ(生ビール)ではち切れそう!途中でBAR

りと大きな木曾駒ヶ岳の全容が見えました。かなり下った鞍部に頂上山荘。あんなに下りるのか・・・もつたない。

黙々と下り、登り返します。登山道の片隅に一株だけ可憐なコマクサが残っていて、辛い登りを一瞬忘れしました。30分ほど息を切らせて登っていくと何やら小さな祠の屋根が見えてきました。「山頂かな?」・・・着きました!!

木曾駒山頂に立つ

12時半、標高2956m、中央アルプスの主峰!!木曾駒ヶ

Rを発見するやいなや吸い込まれるように中へ。気持ちの良い広い庭のテーブルで、一息つきました。ここはアルペルゲも併設。以前会ったフランスの女性と再会。なんと、敷地内のティップが今夜の宿だそう。ここには看板娘(口バ)がいて、となりの巡礼者のパンに寄っています。彼は「NO!イツツマイン」と抵抗。しばらくしたら諦め、今度は笑っていた私たちの方へやってきました。「NO!イツツマイン」カーニャを死守する周平でした。またギンギラの日陰の無い道が続く・・・やつとやつと今回のゴール、カリオン・デ・ロス・コンデス着。

スタートから370km!(完)

岳の山頂に立ちました。山頂に着いたら、すぐに雲が湧いてきて周囲の眺望は見る事ができませんでしたが、山頂の祠の前と標識の前で記念写真を撮ってもらい下山です。

わずかに10分足らずの山頂・・・「もう少し山頂の雰囲気を感じたいかったな」と思いましたが、周平はどんどん下山していきます。どうも、山頂直下に立っていた「頂上山荘食堂」の幟に心を奪われ、そこへまっしぐらに向かっているようです。中華丼とビールフィッシュを注文。ビールはぐつと我慢。

うらへつづく

表からつづく
頂上山荘から中岳へ登り返し、乗越浄土から八丁坂を下り、千畳敷カールを一周する遊歩道に出て、剣ヶ池を巡って山頂駅へ向かいました。その日は駒ヶ根橋の脇に建つホテル『二人静』泊。



夢に見た!?

ソースカツ丼

翌日は太田切川添いの遊歩道を散策、といっても一番の目的は、喫茶店『ガロ』!!：この地方で有名な「ソースカツ丼」の名店です。開店時間に行くと、もうすでに行列! 1時間半程待つて、ようやく中へ。山盛りのキャベツの千切りと4枚のソースカツが乗っています。「うあッーこんな食べられるかな・・」と思いましたが、カツは柔らかく、甘辛のソースが美味。見た目以上にさっぱりしていてサクサクと食べられました。

渡嘉敷裕さんの
歩く植物図鑑
No.39 アカザ

「菊(あかぎ)の杖」という言い伝えを知っている人はかなりいるようだ。しかし単にことばとして知るだけで、肝心のアカザそのものを見たことがなく、どんな草なのか全くイメージできないという人が少なくない。とは言え、アカザはどこにでもあるという代物ではないので、知らないのも当然なのかもしれない。アカザ本体を知らぬままに、藜杖(れいじょう)の言い伝えが独り歩きをしているのは、アカザのもつ宿命によるのであろう。

野富太郎博士の「植物一日一題」に同様な見解が述べられている。「シロザは原野いたるところに野生しているが、アカサは通常圃中に見られ、あまり野生とはなっていないのが不思議だ」という。なるほど、シロザに至るところで繁殖し、「史前帰化植物」とみなされているが、アカサは帰化植物にも入っていない。そもそも藜杖のことわざは中国の伝説によるものらしい。中国では詩経など多くの詩に残されており、一方日本では徒然草にかるうじて記されているものの、アカザを詠んだ古い和歌はほとんどないという。

「藜杖」とはアカザの杖を指す。ついでに「老フル時ハ則チ茎ハ杖ト為スベシ」の言を受けたものと考えられる。かつて日本ではこれとほぼ同じような意味で、老人はアカザの杖を用いれば中風にならないと言われてきた。

落ち、また衣類にも付着しやすい。なお、体質によってはアレルギー症状を起こすので注意を要する。紅紫色の若葉は茎の先に集まり、多くの株が群がっている。美しく、まるで花壇に飾りつけた観葉植物を見ようである。

葉は三角状卵形、卵形で、大きくなると葉身の長さ6〜7cm、幅4〜5cmになる。葉質は柔らかくて食用になり、我が家では専らお浸しになって食卓を飾る。くせのない味で口当たりも良い。ことに市販の薬物が少ない7、8月には貴重している。葉は少々厚みかおり、ホウレンソウ(アカザ科)に似てかみごたえがよい。また蔞酸を含んでいるもホウレンソウに共通している。

葉の食用としての利用は、中国ではたいへん古く、広く栽培されていた。①その歴史は詩経に記されていて、「南山有毫 北山有菜」の「毫」は管子(すげ)、「菜」は藜である。また王維の詩(積雨空林煙火遅し、藜を蒸し、黍を炊いて、東苗(とうさい)に餉(おく)る)に見られる。



アカザの葉の食用は、日本では江戸時代には庶民の暮らしにとけこむようになるが、それ以前、アカザが中国からいつの時代に伝来したのか、よく解っていない。徒然草五八段に、鎌倉末期の歌人兼好は「紙のふすま、麻の衣、一鉢の設け、藜のあつもの、いくばくか人の費えをなさむ」と、遁世者の質素な生活を象徴して、紫の吸い物をあげている。けれども、果たしてアカザを入れたあつものを料理していたのか、この記録だけでは判然としない。中国では古くから食用に供され、粗末な食物を「肺麓(れいかくご)と称していたことから、兼好は清貧な自身の生活を、単に藜藿になぞらえたのかもしれない。江戸時代に入るとかなり普及し、例えば、脱俗生活を送った良寛和尚の「行く秋の哀れは誰に語らまし紫龍に入れて帰る夕暮れ」から、アカザを摘んだ様子がうかがえる。やがて近代に入ると、畑雑草として見られるようになる。戦中戦後間もなくは大いに賞賛され、われ先にと摘んだものである。当時は野菜が不足しサツマイモの葉まで良しとした時代で、アカザは打つつけの救荒植物であった。焼け野原では灰が肥料となつてアカザはよく育つたという。思えば学生のころ植物採集の折、恩師末松直次教授より伺った話―「終戦の翌年、野菜の代わりになるようにと、アカザの種子を山手線の電車の車窓から学生に蒔かせたものです。―まさに事実を裏付ける話である。アスファルトとコンクリートで埋め尽くされた今の都からは、想像できない事実である。肥沃な畑地でこそ育つアカザは、鄙(ひな)びた我が家では庭に年々良く育ち、葉を摘むたびに遠く思い出す。